

森林の村大沢

大沢は山の村です。森林の村です。佐久市の中でもりっぱな森林を持っていることで有名です。大沢に住む人々はこの森林からいろいろな恵みを受けてきました。

今はなくなってしまった有線放送が村に入るときも、村に水道が引かれるときも、電話が入るときも、用水や、道の修理、各地区の公民館の建設など、数え切れないほど山の木を売ったお金が村のために使われてきました。大水をふせいでくれたり、大沢の四季が美しく、空気がきれいなことも森林の恵みがあるからです。

では、大沢の森林はずうっと昔からこのようにりっぱな山だったのでしょうか。

寛保2年（西暦1742年）8月に大雨が降り続き、新田部落の上のほうにあった池がこわされ、新田部落の家や、田や、畑を押し流し、上町、中町、下町まで被害があったと記録に残されています。

このころの山は、自然に生えた雑木林や、草の深い野原ばかりでした。今のようにガスも電気もない時代です。田や、畑で作物を作るにも化学肥料なんかありません。村の人たちはこの山からたきぎを切ったり、炭を焼いたり、堆肥や、家畜のエサをとっていました。家もかやぶき屋根の家が多かったので、屋根をふくかやを刈ったりもしていました。草原の多い山では野火（山火事）も多く、長雨が降れば大水とたたかい、山火事をおそれて暮らしていたのです。

明治になって大沢の山にも木を植えようと考えた人がいました。それは、村会議員の吉岡半治という人でした。

半治は村の人に植林の大事さをとききましたが、だれ一人半治のことを聞く人がいませんでした。反対に「山のたたりがある」とか「洪水がおこる」とかいつて植林をすることさえおそれていました。

そのころ、国や県では山に木を植えるよう進めていました。

村では、半治の意見に反対していた植林の話が再びもちあがり、植林

の計画が進められることになりました。

明治13年、村の予算でカラマツの苗を買い入れ「必ず一戸1人出て、むしようで植林をする。村ぐるみで協力して造林する」という決まりを作って植林を始めました。植林をした場所は、新田部落の西の竹久保地籍で、カラマツ苗15,000本が植えられました。これは長野県でも、町村有林では最初の植林でした。

そのころ、大沢村の村長をしていた人が阿部善蔵という人でした。善蔵は、山の調査をして、村有地に木を植えていきました。国有地であった所も何度も国や、県にお願いをして払い下げをしてもらって木を植えました。あるときは自分の財産を売って苗木の購入代に当てました。大正5年までには989,433本もの木が植まりました。

明治36年大阪で開かれた第5回内国勸業博覧会において大沢村は林業成績優秀のため賞状や、銀杯を受けました。

今、大沢の土地をうるおし、村のために使われる木々のあることは、吉岡半治や初代村長の阿部善蔵、そして植林のためにつくした多くの人々の努力があったことを忘れてはなりません。

一生を植林のために、村の人々のためにつくした善蔵さんは、大正7年1月3日に78歳でこの世を去りました。今でも大沢の人々の心の中には阿部善蔵さんや、当時の人々のころざしが脈々と生き続けています。

大沢村は、昭和29年、野沢町と合併して村ではなくなりました。

大沢村が、村の人たちの協力で、木を切ったあと植林をし、草を刈り、間伐をして、りっぱな木を育ててきた仕事を今、財産区が引きついでやっています。

山の美しい大沢、水のきれいな大沢、それはこのような植林の歴史があるからです。